

薦生牧・廣瀬牧に関する基礎的考察

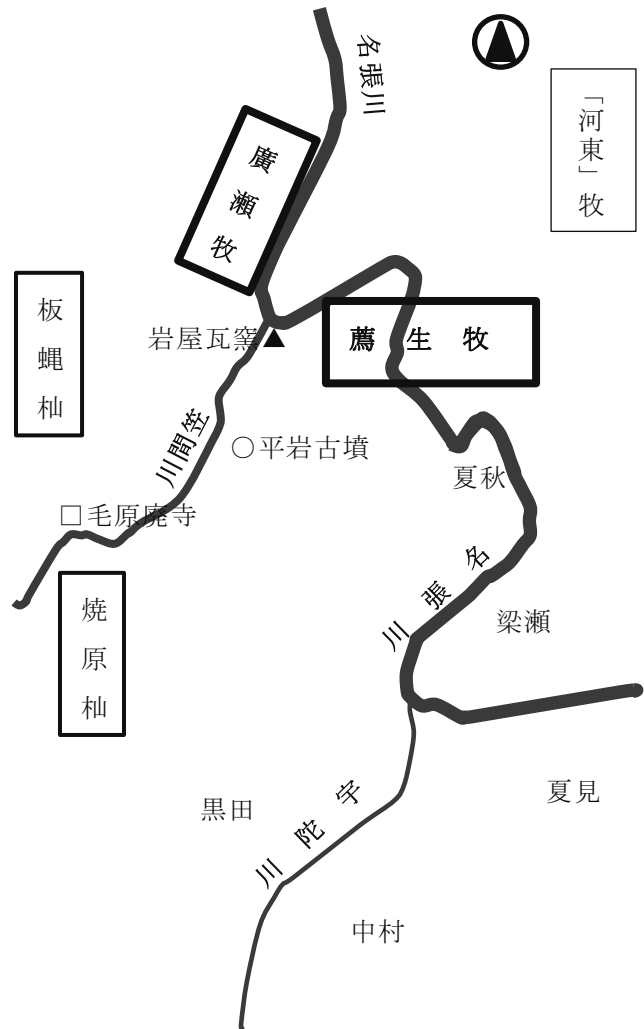
山中 章

はじめに

古墳時代中期まで伊賀盆地の中心勢力は、大規模な前方後円墳を築造した美旗古墳群や御墓山古墳の所在する盆地東部から北東部に基盤を置いた。ところが、後期に入ると、大和王権が新たな埋葬施設として導入した横穴式石室を主体部とする古墳が、名張に築造された。琴平山古墳（名張市赤目）の出現であった。その後も、鹿高神社古墳など名張川上流域に築造が進み、名張地域が大和との結節点として注目される。大和中西部から名張川-櫛田川を通して伊勢南部との交通路が注目された結果であろう¹、6世紀後半から7世紀前半になると、伊勢北西部との接点である柘植地域に奥弁天4号墳が設けられ、王権との深い関係を示す脚付短頸壺が副葬される²。

同じ頃、河川を通して伊賀北西部から大和へと通じる名張川の支流笠間川流域に平岩古墳(群)が築造される。

遅くとも8世紀には、笠間川左岸域の山間部に律令国家が板蠅杣を設ける。笠間川→名張川→木津川のルートで平城京に木材を供給するため



第1図 薦生牧・廣瀬牧・板蠅杣関係図（註4丸山論文33頁図を参考に加筆、作成）

の杣である。板蠅杣は、天平勝宝七歳(755)に孝謙天皇によって東大寺へ寄進される。毛原廢寺が建立されるのもこの頃である。毛原廢寺の所用瓦は笠間川下流域右岸の岩屋瓦窯で生産され³、夏見廢寺など、名張川流域など、周辺の寺院にも供給された。名張郡北西部は、河川を通して物資を運ぶ重要な役割を担っていた。

10世紀中頃、薦生牧(伊賀国名張郡)と廣瀬牧(大和国山邊郡)(以下、「両牧」と記す)が藤原朝成に寄進され、牧の存在が明らかになる。ところが、両牧が板蠅杣と隣接するため、境界争論が発生し、その経緯を示す文書が残されることになる。板蠅杣はその後荘園化し著名な黒田庄の成立に深く関係するため、荘園制の成立を主題に研究が進められる。しかし、両牧に関する研究はほとんどなかった⁴。

そこで本稿では、両牧の所在地を中心に、立地の分析を通して、日本の古代牧の特徴を検討することにする。

一 薦生牧・廣瀬牧の所在地

両牧の初見は、『平安遺文』276「轉經院牧地等去文案」應和二年(962)八月廿日の記事である。煩雑だが、後の論述とも関わるので原文を示しておこう。

[史料1]

^(編註) 薦生牧證文案/栗庄領主進/自院被下之//長寛三年三月 日」(／・／・／は分かち書き、以下同じ)

轉經院度進牧地等事

合貳處

一處在伊賀國名張郡 字薦生者

地

新開治田

荒廢田 梁瀬貳處在字本公驗

四至/東限垣田河并壺野少岑 南限少鮎梁瀬并高岑/西限笠間河并大河 北限高岑//

一處在大和國山邊郡并伊賀国名張郡堺在字本公驗

地

新開治田

梁瀬一處在字本公驗

從河東牧地并山/号蝻曳野者/新開治田//在伊賀國名張郡内

四至/東限水堺山 南限高山/西限大河 北限水堺并道路谷//

地/從河西牧地山等 号廣瀬牧者/新開治田//

四至/東限大河 南限石屋并少野石村笠間河/西限高峯/北限路瀬并道//

右件牧地并新開治田等、依有故僧都御遺言^(延珍) 度進勘解由長官殿如件^(藤原朝成)
應和二年八月廿日 院司僧

法師能聖

法師眞光

大法師

これによると、應和二年（962）、轉經院の故僧都延珍の遺言により、勘解由使長官の藤原朝成に伊賀国名張郡の薦生牧と大和国山邊郡の廣瀬牧が寄進されたことがわかる。

轉經院及び僧都延珍についての詳細は未だ明らかではなく、延珍が藤原朝成に当該地を寄進した経緯や事情も明確ではない。

藤原朝成は藤原北家、藤原高藤の孫で、父は右大臣藤原定方である。叔母である藤原胤子は宇多天皇の女御で、醍醐天皇の生母である。定方は胤子のために勧修寺を建立し、その菩提を弔った。藤原朝成と寺院、僧侶との接点は唯一この点にあるが詳細は不明である。

薦生牧の四至は「東限が垣田河及び壺野少岑。南限が少鮎梁瀬及び高岑。西限が笠間河及び大河。北限が高岑」とされる。富森盛一は、東限の垣田川を現在の田原川とし、名張川の右岸域にも薦生牧の範囲を想定している⁵。後述する牧の特徴的な地形からみて妥当な解釈と言える。

西限の記載に具体名があり、「笠間河」が現在も薦生の西を流れる笠間川でよいとすると、「大河」は北端で合流する名張川であろう。史料1の四至の表記でもって具体的な現地比定が可能となる。

笠間川の東では、名張川が大きく蛇行し、兩岸に広い河川敷が広がっている。南には岩屋の丘陵が、北には現在鶴山と称される峯が所在する。

[史料1]には名張川の東の名張郡にも名称の記載はないが、牧と山(蜷曳野)の記載がある。富森は薦生牧の北に比定している(第2図)。次節で分析する牧関連施設の可能性がある。示された四至は、東限が分水嶺の山 南限が高山、西限が大河(名張川) 北限が分水嶺の山と道路・谷とする。現在「廣瀬」の字名を残す段丘上の集落北部がこの地形に酷似する。

河の西の牧が廣瀬牧である。四至は、東限が大河(名張川)で 南限は石屋(岩屋)及び少野石村と笠間河、西限は高峯、北限は路瀬及び道であるとする。

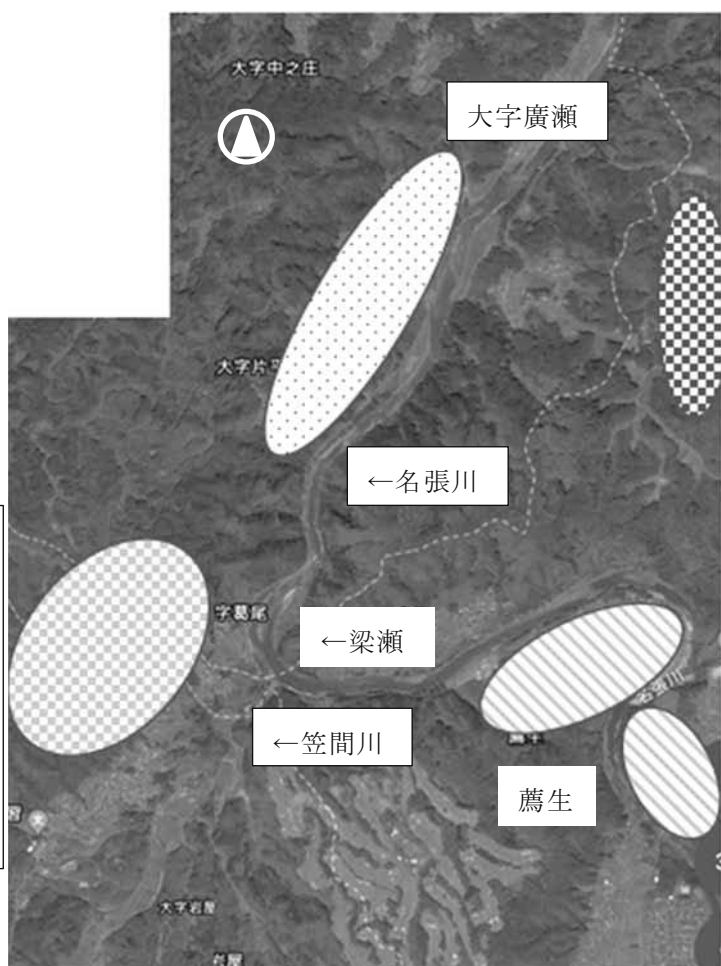
[史料2]にも同様の記載がある。

(前略)

一處在大和國山邊郡堺并伊賀國名張郡堺地

梁瀨一處號廣瀨者

(後略)



第2図は現地形航空写真に上記四至相当地を落としたものである⁷。この様に両牧は国堺を接して所在しており、国、郡が異なるにもかかわらず本来一体的に使用、管理されてきた牧であったため、一括して寄進されたものと考えられる。

その後の様子も、板蠅杣(東大寺)・薦生牧(藤原朝成家領)、在地名張郡との間で生じた争いの記録を通して、以下のような展開をしたことが判る。

①康保元年(964)9月23日に、名張郡刀禰が「東大寺が薦生牧は自己の所領である板蠅杣の四至内部にある」と主張し、境界を定めがたいため、藤原朝成家領の薦生牧の立券を拒否する⁸。

②同年9月25日には、大和国都介郷刀禰等が廣瀬牧他の所在地を確認し、同日、伊賀国名張郡郡司などが、板蠅杣の主張する四至内に百姓の口分田などが所在し、板蠅杣の主張と矛盾することを指摘する⁹。

③同年11月15日になると、朝成家との争いを避けるためか、東大寺は一旦争いから引く姿勢を見せる¹⁰。

④同年11月23日には、朝成家側から「東大寺の妨害」を理由に立券しないのは不当だとの訴えが出され、立券を迫られる。伊賀国夏身郷刀根等は。立券せざるを得なくなる¹¹。

⑤時を経て、康保三年四月二日になると、刀禰等住人達は警戒を緩めず、解状をしたため東大寺の主張を厳しく批判する¹²。

両牧は、その後も東大寺からの圧力を受け続け、本来の牧としての機能がどれだけ維持できたかは不明であるが、これまでに確認できた両牧の立地を他の古代牧と比較して、その構造や機能を比較、分析してみよう。

二 薦生牧・廣瀬牧の地形と古代牧

検討してきたように、関係者のやりとりを通して明らかになったのが、両牧及び板蠅杣の四至や立地である¹³。

(1) 両牧の四至と地形

梁瀬

まず刮目すべきは、両牧が名張川の中流域に連続して設置されていることである。

これを分けるのが名張川の支流笠間川である。第2図で明らかな通り、薦生付近で北流してきた名張川が円弧を描くように大きく蛇行し、西へ方向を変えた後、直ぐに南流し、再び西流する。そして、大和国と伊賀国の国堺を南から流れてきた笠間川と合流すると、その地点に[廣瀬]を形成する。梁瀬とも呼ばれたこの地点で再び流れの方向を変え、直線的に北流し、細長い河川敷を形成しつつ再び流れを西に変え、木津

川に流れこむ

合流地点が薦生牧の西限であり、廣瀬牧の南端でもある。

薦生牧は、大きく蛇行した地点の半円形の河川敷に設置されたものと推定できる。河川敷では水田耕作は不可能であるが、葦や芦などの低灌木が繁茂し、馬の食料となる。[薦生]という地名もこの環境から付けられたものであろう。河川敷の背後には峯が迫っており、放牧された馬はほとんど人工的施設(濠や土塁、柵)を設置することなく囲い込むことができる。後述する通り、日本古代に典型的な牧の立地である。

廣瀬牧は、片平と鶴山の丘陵裾の狭い溪谷を北流する河川敷及び低位段丘上に設置されたのではないかと推測されるが、さほど広い空間を確保することは困難である。

(2) 御牧の立地

『延喜式』左右馬寮式御牧条によれば、甲斐国 3、武蔵国 4、信濃国 16、上野国 9、に合計 32 牧を設置したという。

平安時代に設置された私牧である両牧とは規模こそ異なるが、日本古代牧の代表例であり、発掘調査の進む甲斐国三牧と比較していよう¹⁴。

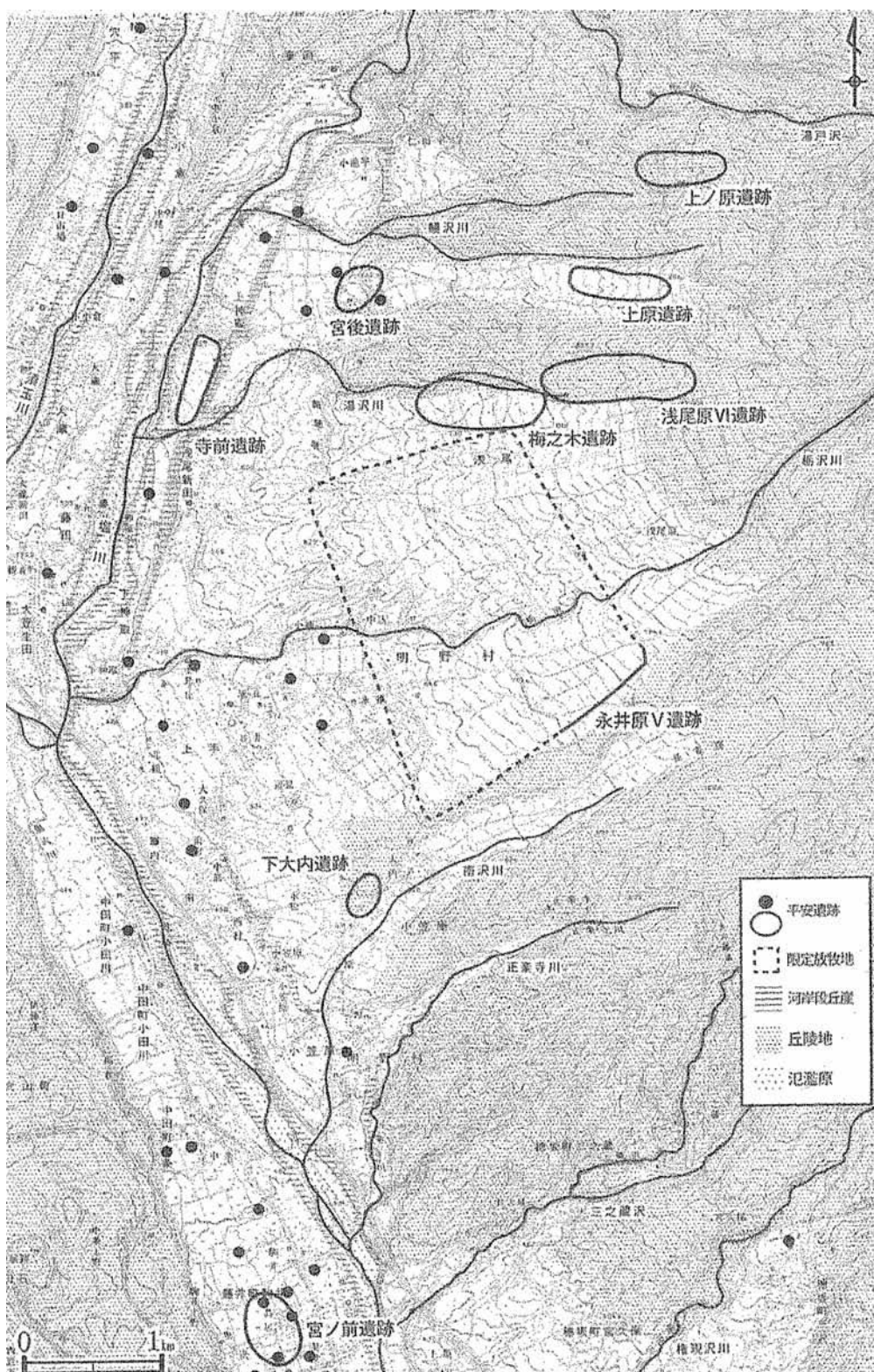
甲斐国真衣野牧推定地では、発掘調査によって数多くの関連遺跡が検出され、多様な機能の分掌を確認できている。遺跡群は釜無川の両岸に展開し、右岸に放牧地、左岸に御牧を経営するための諸施設が設置されている。

右岸に所在する宮間田遺跡は、広大な河川敷の一角に、平安時代の 100 基を超す竪穴住居址や掘立柱建物が集中する特異な遺跡である。ところが、竪穴住居址の一角から「牧口」字の墨書土器が出土し、御牧の一つ、真衣野牧の放牧地と推定された。さらにその後、左岸の段丘上から第3図に示されるような古代遺跡が集中的に発見され、御牧の全体像が徐々に解明されつつある。

代表的な遺跡の概要は以下の通りである。

A. 寺前遺跡：塩川と湯沢川の合流部に位置し、遺跡群において唯一緑釉陶器などを出土する中心的官衙的施設である。塩川と湯沢川の合流部に位置するという遺跡の立地は、物資流通の拠点・川津の機能を有していた可能性がある。当該遺跡群の中心的官衙遺跡であろう。

B. 梅之本遺跡：多数の竪穴住居址や掘立柱建物で構成され、土師器を中心とした食器類に多彩な墨書が施される集落遺跡である。遺跡は一定のグループ毎に変遷していることが明らかにされている。鍛冶遺構や焼印、・鈔帯金具が相伴しており、馬管理に必要な鉄製品を製造を分担する機能を有していた。



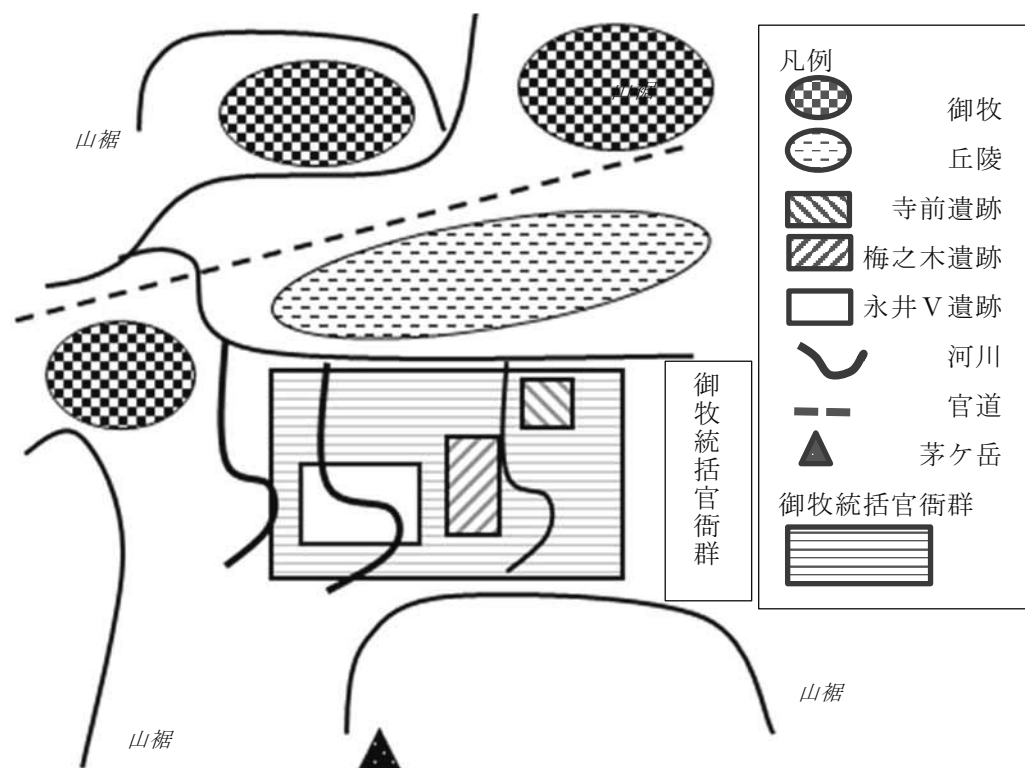
第3図 茅ヶ岳山麓の地形と平安時代の遺跡(註11文献第1図を複写)

C. 永井原V遺跡：遺跡群中央に位置し、700m 前後の範囲を溝により区画した空間である。特別な放牧機能を有した遺跡、あるいは一時的に馬を追い込む空間ではないかと考えられている。

D. 浅尾原VI遺跡：鑄造や鍛造などの燃料として必要な炭焼き土坑を含む鉄製品が出土し、馬管理に不可欠な鉄製品を製造する工房群であろう。

E. 上原遺跡：皇朝十二銭の一つ隆平永寶を伴う住居址群からなる集落である。

この他多様な機能を持つ遺跡群が、釜無川の支流である塩川に流入する小河川（西から南沢川、栃沢川、湯沢川など）毎に分布している（第3図 茅ヶ岳山麓の地形と平安時代の遺跡¹⁵）。後世の小笠原牧との関連を指摘する見解もあるが、山中は、南に推定されている穂坂牧や北に推定できる柏前牧など、いずれの御牧をも統括する複合施設として機能したと理解している¹⁶。



第4図 甲斐国御牧・御牧統括官衙群配置模式図

規模こそ異なるが、名張川が大きく蛇行する兩岸の河川敷を利用する薦生牧の原形を、御牧に求めておきたい。

この他、薦生牧の北部に所在した可能性が指摘されている[河東]牧や「新開治田」

に牧関連施設が設置されている可能性も考えられ、今後、周辺部の集中的な調査によって、薦生牧の全体像が解明できる可能性がある。

一方、廣瀬牧は、名張川左岸の南北に細長い狭小な河川敷に所在したとした。同様な、直線的な河川敷を利用した類例は確認できないが、山間部の谷地形を利用した坂戸牧(大阪府柏原市)推定地は、この地形に近似する。生駒山西麓の山間部に位置する旧谷地形を利用した牧で、三方を崖面で囲われ、南端の狭い部分を人工的に閉鎖して利用された牧ではないかと考えられている¹⁷。自然地形のみで閉塞する直線的空間という点では共通する。放牧地の中でも特別な機能を課した牧である可能性がある。

以上の遺跡群を模式的に示したのが第4図である。古代の御牧が河川の中・上流域に推定され、その推定地が連続するのも、御牧における集約的管理と無縁ではなからう¹⁸。

三 関・駅家の馬管理施設

ところで、古代遺跡には、官衙的施設群とは異なる用途不明の空間が附属している事例が認められる。



第5図右は三関の一つ鈴鹿関の西城壁とその周辺の地形図である。特に注目すべきは、鈴鹿関の南限施設かと推定されていた城山を超えて西城壁が鈴鹿川まで及んでいる点である。これによって、鈴鹿関務所の推定できる北側の空間とは遮断された半円形の空間が出現する。意図的に形成されたこの空間の機能として三関において管理されていた馬の放牧施設の可能性を指摘しておきたい。鈴鹿関は東海道鈴鹿駅を東に併設したことが確認されている¹⁹。火急の事態に備えて駅馬及び関独自の馬が一定数管理されていたとしたら、当該地は河川敷と少峯に囲繞された絶好の空間である²⁰。

第5図左は、聖武天皇の関東行幸に際し伊勢国最初の宿泊地であった²¹。河口行宮(川口関)には、行幸に従駕した400の騎兵が存在した。特に河口行宮では、12日間という長期にわたって馬が留め置かれていた。その空間がどこであったかは不明であるが、河口行宮中枢部の推定されている雲出川の対岸には四方を山と河に囲繞された閉鎖的な空間が存在する。

第6図は三関の一つ、不破関の発掘調査成果の平面図である。四方を城壁で囲まれた関務所空間が検出されている。南辺の条壁が短く、全体が台形状を呈する中心施設である。西面城壁も一部しか確認できておらず、その西には藤戸川が形成した段丘崖が8m余の段差を以て認められている。なぜこうした立地を採用し



たのが不明であったが、鈴鹿関の事例検出によって、この空間（藤戸川と段丘崖の間の北西-南東方向に伸びる河川敷）もまた馬管理空間として利用可能な空間であることが判明した。愛発関については発掘調査がなされておらず、詳細な所在地が未だに不明であるが、同様の空間があった可能性は十分考えられよう。

三関と馬の関係はこれまで不明であったが、検出された遺構を通して、その可能性を指摘できよう。

さらに馬を多用する公的施設に駅家がある。既に山陽道安芸国の安芸駅家については、厩の存在を指摘している²²。しかし、改めて遺跡を検討してみると、駅館院の南築地と小河川との間には段差があり東西に長い空間が広がっている。あるいは駅馬を管理するための空間として機能したのではなかろうか。全国の駅家についても同様の地形が選ばれた可能性は十分ある。今後の調査課題である。

おわりに

伊賀国名張郡や大和国山邊郡に所在したとされる薦生牧と廣瀬牧の所在地を特定する分析の過程で、両牧の示す地形的特徴が、日本の古代牧、とりわけ御牧の立地と共通していることを明らかにした。

既に指摘したことであるが、2012年8月に実施した甘肅省礼県に所在した犬丘の遺跡は、戦国時代の秦が、モンゴルから導入した馬を放牧するための施設として設定したと伝えられている。現地を踏査した時、その地形が日本の御牧と余りに酷似していることに驚いた。広大な原野を有しない東アジアの諸国では、河川と丘陵などの自然地形を最大限に活かした地形を利用して牧を形成した。薦生牧・廣瀬牧の両牧もまた、その流れを汲む構造をなしていた。東アジア史を考える上で極めて貴重な研究成果を得ることができたと考えている。

これまで、牧の研究は予想される空間が広大な上に、残される遺物も、蹄鉄や焼印など遺存しにくい遺物に限られていたため、ほとんど具体的な分析がなされてこなかった。しかし、宮間田遺跡の発見によって明らかになった甲斐国真衣野牧及びその周辺の牧関連施設の検出によって、より具体的な姿を知ることができた。

さらに、牧には特定の地理的条件が必要とされることを確認し、地形分析と地名分析を合わせるによって、具体的な所在地特定を可能にすることも明らかにした。本稿を契機により本格的な研究が開始されることを望みたい。

本稿は平成30年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究代表者奈良大学吉川敏子研究課題「日本古代の畿内・近国における牧の総合的研究」による研究会での報告成果

の一部である。

本稿を為すに当たっては、科研代表者である吉川敏子氏、研究協力者である清水みき氏から多くの示唆を受けた。

また、22 年間、お世話になった三重大学人文学部塚本明先生、山田雄司先生、小澤毅先生から多大なるご指導、ご援助を賜った。末筆ながら学恩に感謝して拙文を閉じたい。

なお、本稿の主題である薦生牧の所在地については忘れられない思い出がある。当該地は、2002 年入学生の実家のすぐ前に所在した。同時在學生と共に何度か訪れた「薦生」という地名は、強く印象に残っていた。牧研究を開始し、薦生牧の存在を知った時、直ぐにこの地の地形を思い出した。研究を深化させることができたのもこの経験が大いに役立った。三重大学で行った学生教育とも関連した思い出深い遺跡に関する拙文を最後に残すことができた。感謝以外の何ものでもない。

(2020 年 2 月 16 日脱稿)

¹ ①門田了三他『名張市史 資料編 考古』2015 年②拙稿「第 2 章 原始の亀山市域第 2 節古墳時代の亀山」(『亀山市史 通史編』亀山市史編さん委員会編 2011 年 2015 年改定)

² 拙稿「伊勢国北部における大安寺墾田地成立の背景」(三重大学歴史研究会『ふびと』第 54 号 2002 年)

³ 奈良県立橿原考古学研究所『毛原廃寺跡発掘調査報告』(報道発表資料)2016 年 7 月 26 日(文末付録参考資料参照)

⁴ ①丸山幸彦「一〇世紀における庄園の形成と展開―東大寺領板蠅柚を中心に―」(『史林』五六一六 1973 年)②関 幸彦「薦生牧相論をめぐる諸問題」(『学習院史学』10 1973 年)③黒田日出男「十・十一世紀の四至について―板蠅柚と薦生牧―」(『民衆史の課題と方向』三一書房 1978 年)④高橋浩明「伊賀国薦生牧争論と 10 世紀の郡司制」(『国史学』1987 年)⑤その他『名張市史 資料編考古・古代』2010 年においても総括的に触れられている。

⁵ 文学博士平岡定海校富森盛一著『黒田庄誌』(赤目出版会 1968 年)

⁶ 「大和国都介郷刀禰等解案」(『平安遺文』279 康保元年九月廿五日)

⁷ 板蠅柚と両牧との位置関係などについては前掲註 5 において富森が略地形図を用いて図示しているが、図示の主目的が黒田庄にあるため、牧についてはさほど正確ではない。そこで、史料記載の地形や地名を参考に現在の虚空写真に推定地を落としたもの第 2 図である。

⁸ 「伊賀国名張郡司解案」(『平安遺文』278 康保元(964)年九月廿三日)

⁹ 大和国都介郷刀禰等が廣瀬牧他の所在地を確認し(註 6 史料)、伊賀国名張郡郡司などが、板蠅柚の主張する四至内に百姓の口分田などが所在し、板蠅柚の主張と矛盾することを指摘した(「立券使清忠王板蠅柚四至實検日記案」(『平安遺文』280 康保元年九月廿五日))。

¹⁰ 「東大寺告書案」(『平安遺文』281 康保元年十一月十五日)

¹¹ 「名張郡夏見郷薦生村刀根等解案」(『平安遺文』282 康保元年十一月廿三日)

¹² 伊賀国名張郡夏見郷刀禰等解案」(『平安遺文』289 康保三年四月二日)丸山前掲 4-32 頁においてその重要性を指摘している。なお、その後も東大寺との間で長く争論は続く(藤井庄領家小輔書状(『平安遺文』3834 治承二(1178)年六月廿日)や「東大寺三綱等陳状案」(『平安遺文』3835 治承二年(1178)六月)が、これらについては省略する。

¹³ 早川康夫「古代馬政―河内、信濃 16 牧の立地と馬産供用限定地への発展―」(『Glassland Science』41 巻第 2 号 1995 年)

¹⁴ 2012 年 8 月、科学研究費基盤研究(A)による東亜比較都城史研究会でシルクロード上に所在した秦の犬丘の牧を踏査した。この結果、古代中国で初めて馬を導入した秦においてもその牧は自然地形を活かし、四方を河や崖で囲った地形を利用して設置されていた。

¹⁵ 佐野隆「小笠原牧の考古学」(入間田宣夫・谷口一夫編『牧の考古学』高志書院 2008 年)

¹⁶ 拙文「『近畿古代牧研究会』第19回研究会発表資料 甲斐国御牧に関する覚え書き」(2019年11月14日 於奈良大学)

¹⁷ 安村俊史「坂戸牧考」(『柏原市立歴史資料館館報第31号』2019年)

¹⁸ 詳細は別稿に譲るが、信濃国の御牧は千曲川流域の北信濃地域の高位牧、大室牧、新沼牧、新治牧、塩野牧、長倉牧、望月牧、塩原牧などが連続して位置する。さらに、天竜川流域の南信濃地域の猪鹿牧、大野牧、埴原牧、山鹿牧、岡屋牧、宮所牧、平出牧もまた連続して位置する。詳細な調査は行われていないが、その多くが流域の連続する河川敷に所在した可能性は高い。

¹⁹ 山中章前掲註1拙稿

²⁰ 藤原仲麻呂の乱における三関への迅速な勅命の伝達に馬は欠かせなかったはずである。

²¹ 『聖武天皇伊勢行幸地の総合的研究 課題番号15320107 平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(B) 研究成果報告書』(2007年)この調査によって、雲出川右岸に行宮の中心施設が置かれ、その東に厨房など雑舎が配置されたと推定した。報告書では検討できなかったが、雲出川左岸の図示地域は馬の管理空間としては最適な地形をなしている。

²² 安芸駅の跡である下岡田遺跡(広島県府中町)の発掘調査では、駅家の背後の段丘上に厩の存在が指摘されているが、駅家の南に所在する河川敷もまた、その有力な空間である。(拙稿「安芸国安芸駅館小考」(広島県文化財協会『広島県文化財ニュース第160号』1999年)

(やまなか あきら 三重大学名誉教授)